

# „PARITTA“ の 研 究

日 暮 京 雄

- (一)「Paritta」の語義、用語例及その變遷——(二)小乘典籍に現はれたる「Vijja」、「Mantā」——(三)佛陀のそれに對する態度、流行の因由、Paritta(明呪)佛說論について、佛說大孔雀呪王經の原材として Paritta (Paritta 發展の實例)——  
(四)「Paritta」經典の種類——(五)後世密教との關係。

## 一

「Paritta」<sup>(1)</sup> (*Skt. Paritrāṇa*) は「trā」「救ふ」といふ語根より出たる中性名詞であり、「防護」といふ義である。この防護を意味する「Paritta」の同義語として Rakṣā (*Skt. rakṣā*), Gutti (*Skt. gupta*) があり、經典には常に此の三語が列べて用ひられて居る。而して是等には何等「呪」の意義はないものであるが、「jāṭaka」等に來ると、何時の間にか是等三語の中「Paritta」なる語が優秀なる意義を持ち、「Mantā」(*gSaṃ-sṃags*) と同義に用ひられる様になつたのである。今、その例に *Morā-jātaka* (*Jātaka. No. 159*) を引用しよう。この「孔雀本生」は後に説明する如く、佛說大孔雀王呪經と深き關係あるから長くなるが此處に引用する。

「往時、波羅斯國に、梵與が王國を始めて居た時に菩薩は孔雀として托胎し、卯の時にはカニカラ樹の芽の色であつたが、殻を破つて出た時には金色で美しく、翼には赤色の縞があつた。彼は生命を保護する爲に山王の三峰を繞つて、第四の三王である金色山ダンダカの高原に居をしめた。東明に嶺にとゞまり、太陽の昇るを眺め、自己の領域を安全に守護する爲にブラフマ・マンタ(Brahmantaka)を「彼は昇ると」初めつゝ、

一、彼は昇る、有眼者、獨一の王よ、

金の色、地上の光明、

その金色に、地の光に、私は歸命す、

この今日の日を護持し給へ、と。

かく、菩薩は是の偈で太陽に歸命して第二偈にて過去に涅槃し給へる佛陀と佛陀の徳にも亦歸命するであらう。

二、吠陀を了し、一切法に通繞する婆羅門等に、

我は歸命す、郷等は我を護れ。

諸佛に稱讃あれ、菩提に稱讃あれ、

解脱者に南無し、解脱に歸命す。

(nam' athhu Buddhānañ, nam' athhu bodhiyā, namo vimuttīnañ, namo vimuttiyā.)

彼は此のバリッタ (Paritta) をなして孔雀は望のまゝに行く、と。

此處に於て見らる如く「Paritta」は「Brahma manā」と同じ語義を持つてゐることが知られやう。なほこゝに注意せねばならぬことは「本生話」作者が「Brahmananta」を「Paritta」を區別して用ひその「Paritta」の著しく佛教的なることは忘れてはならぬことであらう。更に我等は此處に Paritta なる語の「呪」と譯されてゐる所を見出す。「四分律」第四二卷藥犍度(大正、XXII, p. 870. b.)に若此比丘慈心於一切衆生者、亦不爲彼蛇所螫殺、佛聽作自護慈念呪。

これに相當する Culla-Vagga v. 6. Khuddakavayathukhandhakarā に

「sace hi so bhikkhave bhikkhu imāni cattāri alihirajākulāni mettena cīttena phareyya. na

hi so bhikkhu ahinā dāho kālam kareyya, anujānāmi bhikkhave imāni cattāri ahirajākulāni mettana cīttena pharituṃ attagutiyaṃ attarakkhāya attaparitaṃ kātuṃ.」

とある。此の文に於て、「佛、聽作自護慈念呪」と漢譯せしは、「anujānāmi bhikkhave……………」

attaparitaṃ kātuṃ」に相當する梵文原典を意譯したものであることを推定して不可はなからう。

こゝに於て「Paritta」の第一義なる「防護」の義は一層高められ強められて、Manta の義となり Vijiā (Skz. Vidya) の意味となつた。阿闍婆吠陀の Mantra は佛教に洗禮をうけて Paritta として誕

生したのである。これその第二義である。第三には南方經典にあつては——四項に於てあげらるるものであるが——Paritta 的に讀誦せらるゝ經 (Sutta) を Paritta として居ることである。これは Paritta 即ち Sutta である。

最後に、是等 Paritta 即ち Sutta を一とまとめにして集録せらるることとなつた、現今錫蘭に於けるピリット集なるものは、その次第増廣せられ、そは南方佛教には一藏としての位置を保つてゐるものではないが、これ法藏部などの明呪藏に相當するものである。

## 二

然らば何故に佛教的 Mantra が Paritta と名づけられる様になつたか、Paritta が何故佛教に起らぬばならなかつたのであらうか、大聖釋尊が唱導せし佛教は正統婆羅門教及び非正統婆羅門教(六師外道)の立場を遮し、無我、五蘊、緣起の範疇の認識にあり、八正道によつて解脱を得、正覺を得る教であつた。この特異なる立場を持ち清新、純粹、無垢な教も、釋尊在世の時には、この佛陀の人格を中心として生々とした生命が通つて居つたから、阿闍婆吠陀以來の民間信仰など到底入る餘地がなかつた。然し、滅後敎團人の生命のなくなるにつれて激しくなつて來たこの信仰を、そのまま打ちすててをくことは不可能となり、ここに Paritta として行はるることとなつたものである。

如何に是等の民間信仰の激しいものであつたかを見る爲に、ここに小乘典籍に現はれたる、是等



の呪文を見ることとしよう。

1. Vāṭṭhu-Vijja(*Skt. Vāstu*) 安宅符呪、事明(家を建てる時の呪)(Di. § 20, Dh. § 56, 長' 一三', 一四' D.A. 122, 婆娑論 百二卷)。
2. 歳呪(能く千萬歳に住することの出来る呪)(智論五八卷)。
3. Vedabbaimanta (七寶の兩を降せる呪)(J. 1. 253)。
4. Nidhi-uddharaṇa-manta (祕密の寶を見出す呪)(J. III. 116)。
5. 不時に果物の熟る呪 (*akāle phalaṃ gaṇhā gaṇhāpana manta*) (J. IV. p. 206)。
6. 水火呪、水明、火明(長' 一三' 一四' 婆娑論百二卷)。
7. 火燒呪(長' 一三' 一四)。
8. 治毒呪(十誦律第四九卷、四分律第二七卷)。
9. 腹痛、治腹内虫痛呪(同上)。
10. 治宿食不消呪(同上)。
11. Siva-vijja(*Skt. Śiva*), 或<sup>た</sup> Singālavuta-V. 鬼呪(墓地の鬼を祓ふ呪)(Di. § 20, Dh. § 56, D.A. 122)。
12. Bhūta-Vijja(*bhūtavejja manto*, 魔を祓ふ曼怛羅)(同上)。

13. Bhūri-Vijja (bhūmighare vasantena uggaḥetabba manto (土屋に入つて住する時唱ふる曼怛羅) (同上)。
14. Abhi-Vijja 蛇呪、龍蛇明 (出據 1 と同じ)。
15. Visa-Vijja (毒を防護する呪) (出據 10 と同じ)。
16. Viccika-Vijja (蝎蠍毒を拂ふ呪) (同上)。
17. Mūsika-Vijja 鼠嚙解呪 (同上)。
18. Ālambāṇa-manta (the charm which commands all thing of sense) (J. 506. IV. p. 454)。
19. Khatta-Vijja 刹利呪 (政策呪) (長、一三、一四、Di. § 20, Dii. § 56)。
20. Paṭhavijaya manta (世界征服呪) (J. 241)。
21. Dhanu-agamaniya ambatṭha vijjā (Dh. 265)。
22. Sara-raparittāṇam manta (矢防護呪) (18 と出據同じ)。
23. Aṅga-Vijja (*S&*. 同じ) 支節呪、支明 (手相術呪) (出據 1 と同じ)。
24. 星明 (婆沙論百二卷)。
25. Pakkajjhānam (人の壽命を予言する術) (Di. § 20, Dii. § 86)。
26. 死人の頭をたいて生所を知る呪 (Dh.A. IV. p. 226)。

27. Sabba-rāva-jānana-manta (凡ての動物の叫聲を知る呪) (J. III. 415)°
28. Sakuṇa-Vijja (*Skt. Çakunt*) 禽明 (鳥の語を解する呪) (Di. § 20, ii. § 56, 婆沙論百二卷)°
29. Vāyasa-Vijja (鳥の鳴聲により吉凶を知る呪) (Di. § 20, Di. § 56)°
30. Miga-cakkam 獸明 (獸の語を知る呪) (Di. § 20, ii. § 56, 婆沙論百二卷)°
31. 象呪、象鉤明呪 (長、一三、一四、婆沙論百二卷)°
32. 孔雀明 (婆沙論百二卷)°
33. Gandhari-Vijja 健駄利明、健陀黎明 (飛行し變化する呪) (D. 1. p. 213, 長、堅固經、J. IV. 498, 婆沙論二百卷、智論五八卷)°
34. Ghoram-Vijja (*Skt. ghorī*) (他人に見えず歩く呪) (J. IV. p. 496, Div. p. 636)°
35. Bhūmi-cala-Vijja (地震呪) (Dh. 1. 259)°
36. Cintāmaṇi-Vijja (思惟摩尼呪) (J. III. 504)°
37. Catu-kaṇṇa manto (四耳呪) (J. VI. 392)°
38. Maṇḍika-Vijja 椰叉尼呪 (他人の心を知る呪) (長、一三、一四、D. i. p. 214)°
39. Manojavā-Vidyā (biv. D. 636)°
40. 瞿臘毘明 (婆沙論百二卷)°

41. 刹尼迦明 (同上)。
42. 迷亂明 (同上)。
43. 泥梨泥呪 (十誦尼律、大正 XXIII. p. 322)。
44. Hattābhijāppana (手を不具にする曼怛羅) (Di. § 26, bi. § 61, D.A. p. 126)。
45. Kāṇḍiappana (韓にする曼怛羅) (同上)。
46. Jivha-nittaddanam (啞にする曼怛羅) (同上)。
47. Hanusamhananan (顎をはずす呪) (同上)。
48. Abhujjālanā (口より火を吐く呪) (同上)。

右にあげられたる如く、實にあらゆる場合の呪文が見出されるであらう。是等多數のものもその目的からすれば、(一)息災のもの、(二)開運のもの、(三)呪咀のものと三種に分たれる。佛教の、その發展の道程に於て、實に是等の下層の潮流を見棄て、行くことは出来なかつたものである。是等三種の中、第三の呪咀は「Paritta」中には見出すことの出来ぬものであり、佛教の特色なることを忘れてはならぬ。その性質上より更に之を見れば善呪と惡呪の二種となる。Paritta 中には後者の呪は之を求むることは出来ぬ、これを形式の上より見れば一句 (Akshara) 呪、二句呪、三句呪、四句呪多句呪、百千句呪 (中阿、第四十七卷) と分たれ、四分律第二十六卷 (大正 XXII. p. 743) に六群比丘

尼、小事を以て互に瞋恚し呪咀なせし時、佛はそれを遮し、南無阿彌陀佛と稱ふことを聽す記事あり、その記事たる勿論佛陀に歸することは出來ぬけれども、簡單なる四句呪である。

三

然らば、是等の思想に對して佛陀は如何なる態度をとつたものであらうか。これに就いて最近の梅尾氏の著なる『曼荼羅の研究』中の「眞言陀羅尼」なる論文の、(四)「佛陀と眞言」なる題下のもとに『十誦律』第四十六、『四分律』第二十七の兩文を引用して、大體、釋尊も攝取の方便として善呪ならば默認せられたものである様に論せられて居るが、余には承認せられない。

今これを「戒本」の上から之を見ると、

(一)、四分比丘尼戒本、波逸提(大正 XXII. p. 1036 f.) (法藏部)。

一一七 若比丘尼誦<sub>二</sub>習世俗呪術<sub>一</sub>者、波逸提。

一一八 若比丘尼教<sub>二</sub>人誦<sub>二</sub>習呪術<sub>一</sub>者、波逸提。

(二)、五分比丘尼戒本、波逸提(大正 XXII. p. 211 f.) (化地部)。

一九〇 若、比丘尼誦<sub>二</sub>外道呪術<sub>一</sub>若教<sub>二</sub>人誦<sub>一</sub>、波逸提。

(三)、摩訶僧祇比丘尼戒本、波夜提(大正 XXII. p. 562 b) (大衆部)。

八三 若、比丘尼作<sub>二</sub>醫師活命<sub>一</sub>、波夜提。

八四 若、比丘尼、授<sub>二</sub>俗人外道醫方<sub>一</sub>者、波夜提。

(四)、十誦比丘尼波羅提木叉戒本、波夜提(大正 XXIII. p. 485) (有部)。

一四〇 若、比丘尼、讀<sub>二</sub>誦種種々呪術<sub>一</sub>、波夜提。

一四一 若、比丘尼、教<sub>二</sub>白衣<sub>一</sub>讀<sub>二</sub>誦種種々呪術<sub>一</sub>、波夜提。

(五)、根本說一切有部苾芻尼戒經(大正 XXIV. p. 515) (有部)。

一五〇 若復、苾芻尼從<sub>二</sub>俗人<sub>一</sub>受<sub>二</sub>學呪法<sub>一</sub>者、波逸底迦。

一五一 若復、苾芻尼教<sub>二</sub>俗人呪法<sub>一</sub>、波逸底迦。

とあり、善呪、惡呪に就いての制戒ではなく、呪術一般に就いての制戒なることに注意せねばならぬ。而して是等に相當する廣律、殊に梅尾氏の所論を注意する爲に、十誦律、四分律を見るに

十誦尼律(大正 XXII. p. 337a f.) には、

佛、金衛國にありき。その時、迦羅比丘尼あり、先にこれ外道なり、經、律、阿毘曇を棄捨し、種々誦術を誦讀す。この中、比丘尼あり、少欲、知足にして頭陀を行じ、是事を聞き喜ばず、種種因緣呵責す「何ぞ比丘尼と名けんや、經、律、阿毘曇を棄捨し種々呪術を誦讀するを」と。種種因緣呵し己りて佛に向つて廣説す。佛、是の事を以て二部僧を集め、知らしめて而も故らに迦羅比丘尼に問ふ。「汝、實にこの事をなすや、否や」答へて曰く、「實に作す、世尊よ」と。佛種々

の因縁を以て呵責す、「何ぞ比丘尼と名けんや、經、律、阿毘曇を棄捨し、種々呪術を讀誦するを」と、種々因縁を以て訶し已る。諸比丘に語るに十利を以ての故に比丘尼を結戒す。今より、この戒、當にかくの如く説くべし、「若し比丘尼、種々の呪術を讀誦するは波逸提なり。」波逸提とは燒煮覆障なり、若し悔過せれば能く道を障礙す、この中、犯とは、若し比丘尼、種々の呪術を讀誦し、若し是れ偈を説かば偈々波逸提、若しこれ章を説かば章々波逸提、若し別に句を説かば句々波逸提なり。不犯とは、若し治齒呪、腹痛呪、治毒呪を讀誦するも、若し守護安穩の故になせば不犯なり。

ごあり。四分律卷二十一(XXII. p. 754b f.) に於て、

その時、婆伽婆、舍衛國、祇樹給孤獨園にありき、時に、六郡比丘尼あり、種々雜呪術を誦す、或は支節呪、或は利利呪、鬼呪、吉凶呪、或は鹿輪トを轉ずるを習ひ、或は音聲を解知するを習ふ。時に諸比丘聞く、その中少欲、知足、頭陀を行じ樂しみ、慚愧を知る者あり、六群の比丘尼を呵責して言く……比丘尼、世俗の呪術乃至音聲を誦習し、若しは口に受け、若しは之を執りて誦し、説き了らば波逸提を了す。了らざれば突吉羅を了す。比丘は突吉羅、式叉摩那、沙彌、沙彌尼は突吉羅なり、これ謂く犯となす、不犯とは、若しは治腹内虫病呪を誦し、若しは治宿食不消呪を誦し、若しは書を學び、若しくは世俗降伏外道呪を誦し、若しくは治毒呪を誦す、護身

を以ての故に無犯なり、無犯とは最初いまだ制戒せず、癡狂、心亂、痛惱、纏ふ所なれば。

とあり。五分律第十四(大正 XXII. p. 98b)、摩訶僧祇律卷第三十七(大正 XXII. p. 531a)、根本說一切有部毘婆沙尼毘奈耶(大正 XXIII. p. 1012)も以上に相當する所であるが、不犯に就いて説明をしてゐるのは讒かに、十誦律と四分律とに過ぎない、然して、この廣律なるものは各部派の傳持のものであり、其處に各部派特有の説明が試みられてゐることを見逃がしてはならぬ。尙、興味深いことは不犯をいふ「四分律」は法藏部傳のものであるが、「若しくは世俗降伏外道呪を誦し、若しくは治毒呪を誦す、護身を以ての故に無犯なり、無犯とは最初未だ制戒せず、癡狂、心亂、痛惱、纏ふ所なればなり」とあり、此處に明に法藏部が佛滅三百年、化地部より分れ、明呪藏(毘睺陀羅必椀家、Vidyadhara-pitaka)を公然と所有する様になり、此處に無犯の記事が出來たものであると推定するも不可なからう、然も「無犯とは最初未だ制戒せず、癡狂、心亂、痛惱、纏ふ所なればなり」といふは、是等の記事の部派特有のものなることを白狀して餘りなしであらう。それ故に梶尾氏の所論は典籍批判の乏しく、一切を佛陀所說に歸する偏見たることは免れぬであらう。

尙、この明呪、Paritta をば佛所說に歸せんとする説は古くより存し、智度論卷五十七(大正 XXV. p. 464b.)には般若波羅蜜は大明呪無上呪であり、これを讀誦するものは軍陣に入るも命を失はず、刀箭も傷けずと經典に說かれてあるが、現に受持讀誦するものもあるも、軍陣に入り刀兵の爲に傷け



られ、或は命を失ふに至る。又佛說業因緣空にあらず、海中にあらず、免れ得る者あることなし (Dh. 127, 五分律廿一、十誦律三十八) と説いて居るが、是等の説相に矛盾があるではないかの疑問に對し二種の業因緣あり、(一)必應に報を受くるべし、(二)必しも報を受けず、この第二の爲に佛は説かれたりと述べられて居る。

この疑問は獨り龍樹のものではなく *Miṇḍa panha* (p. 150) にもバクトリヤ王、彌隣陀王と那先比丘との間にこの Dh. 128 (増一、廿三) を出し、問答が記されてある。既に紀元前二世紀——後一世紀の作とせらる、この經典にあるこの記事よりこの所説の古き問題なるを知り得と共に、一群の *Paritta* 經典編輯を知り得るのである。

以上の戒律の諸引用文によりて佛陀のそれに対する態度は明になるたことであるが、更に *Te-vijā S. (D. 13)* 三明經(長阿、第二十六經)を閱讀すれば思ひ半ばにすぐるものがある。現今典籍研究に於て、古き編纂なりを一般に認められてゐる *Sutta nipāta*, *Aṭṭhavagga* 14, 927 以下

*Aṭṭhabbayan supinam lakṣhaṇam*

*no vidāhe atho pi nakkhattam,*

*Virutaṇ ca gabbhakaraṇam*

*tikkicchaṇ nāmakō na seveyya.*

(阿闍婆吠陀、夢、相、

星術も亦、行はざれ、

鳥獸の音、妊娠の法、

醫術をも我が宗徒行はざれ。)

とあり、短き偈なるも、その釋尊のこれに對する態度を明かして餘蘊なきものといふことが出來やう。

かくの如きは、實に佛陀のそれに對する態度であつた、然して佛教に消化されし「Parita」なるものは、「陛下よ！ 我々の Manta とは外ではありません、我等三十人程のものは生物を殺さず、與へられざるものを奪はず、妄語を言はず、酒を飲まず、慈悲を修し、布施を與へ、道を平坦にし池を堀り、休息所を作る、これが我々の Manta であり、Parita であり、増益 (Vaddhi) である」(Jātaka No. 31. Kūṭavaka-J) につくるものであるが、尙、一般民衆の下層信仰を善導し、佛教に趣入せしむるの目的をもつて、沙門、婆羅門の呪術は抱擁的な佛敎に純化されつゝ、殊に滅後、部派發生に至りて此處に「Parita」即ち明呪、神呪 (Vidyā) 陀羅尼の發生を見ることゝなつた。

こゝに「Parita」に——後に Parita 經典を擧げる條下の No. 10, No. 13——その素材を求めて成立せし陀羅尼經典、加ふるに義淨の語を以てすれば、「五天の地、南海十洲及北方土貨羅等二十餘

國、道俗と問ふなく、大乘小乘、皆共尊敬し讀誦し、或、福利を蒙らんことを求む」と讃嘆せられた佛說大孔雀呪王經に就き、その發展段階を述べやう。

『南條目錄』によれば、次の六經がある。

- (1) No. 306. 佛說大孔雀呪王經、義淨譯(A.D. 705)
- (2) No. 307. 佛說大孔雀明王經、不空譯(A.D. 746—771)
- (3) No. 308. 佛說孔雀王呪經(孔雀王陀羅尼經)、僧伽婆羅譯(A.D. 516)
- (4) No. 309. 佛說大孔雀王神呪經、帛尸梨密多羅譯(A.D. 317—426)
- (5) No. 310. 佛說大孔雀王雜神呪經、同上
- (6) No. 311. 大金色孔雀王呪經、鳩摩羅什譯(A.D. 384—414)

是等六經の中、(1)、(2)、(3)の三經は“A Chinese Text Corresponding to Part of the Bower Manuscript”(J. R. A. S. April, 1907)を題して、渡邊海旭先生が既に指摘せられてゐる如く Bower Manuscript, plates. XIX—liv に一致してゐるものであり、(4)、(5)、(6)の三經は前者三經より原始的のものであり、又發展段階の少なきものである。これ等後者の三經は、今、余の研究の主目的には必要なきものであるから、それは後日、孔雀呪王經の研究に譲ることにして前者の三經の蛇呪、即ち Abhinā-paritā の發展を見る、とせしやう。勿論前三經は No. 159. Mora-jātaka(Mora-Paritā)を

No. 503. Khandavatta Jataka (Khandā-Paritta) の二をその經の主原材とし、後者の三經は Mora-Jataka のみをその素材としてゐる。後者三經の中、(4)、(5)の二經はその中最も原始的のものであり、(4)には未だ Ahinā-Paritta は原材となつて居らないが、(5)にはその序文のみを載せて、後世發展の鍵を見出すことが出来る。而して(5)佛說大孔雀雜神呪經中には法華神呪經ありて、勇施所說呪毘沙門天所說呪、持國天所說呪、羅刹世所說呪等は妙法華經陀羅尼品第二十六を合譯し合載されるものであり、尙解說經下結呪、佛說呪賊經、大涅槃經等雜種の呪を附加雜入したものである。而して、前者(1)、(2)、(3)と後者、(4)、(5)、(6)との間に譯の年代に就き相違のあることも見逃してはならぬことであらう。即ち後者は前者の經典の製作される迄獨立してゐたものであり、又 Khandā-Paritta は Khandā-Paritta として存在し流行してゐるものならんも、漸次、陀羅尼へと發展して行く過程の中、更に孔雀は蛇の傳統的なる大敵であるが、こゝに蛇呪 (Khandā-Paritta) は孔雀呪 (Mora-Paritta) の中に攝取され融合して大孔雀呪王經となつたものである。

然らば、(1)、(2)、(3)等の素材となつた蛇呪 (Ahinā-Paritta)<sup>(iii)</sup> は何れより借られたるものであらうかそれ等の關說されてゐるものを擧ぐれば、

- (a) A.N. Vol. II. 67(p. 72—73) (増1、缺) (b) Khandhavatta-Jataka(J. Vol. II. No. 203) (c) 雜阿卷九 29,(S.N.缺) (d) C.V. V. 6. Khuddakavathukkhanda-hakam. (e) 四

分律第四二卷、藥犍度之一(大正 XXII, p. 870b) (s) 摩訶僧祇律第二〇卷、單提(大正 XXII, p. 389)、(s) 五分律第二六、第五分雜法(大正 XXII, p. 171a) 等があるが、正しくは是等七ヶ所の中何れが大孔雀呪王經の原材となつたものであらうか、此處に注意すべきは、かくの如く經律に渡りて多くの蛇呪の存在するは、釋尊の存在中説かれたものでないかの疑問である。

(a) これに相當する巴利尼柯耶の經が缺けてゐることが、部派以前にまでは是の經をあげるに躊躇するものである。これに相當する増一阿含第十九卷第八經には、こゝに四種龍をあげるが、卵生、胎生、濕生、化生の四種をあげ、この方が増一阿含編輯の主意になつて居り、巴利の方は如何にも四を數へる目的から、四種龍王の記事のありしものより持つて來たといふ様に思はれ、更に「Attanannā sammāsambuddhāna」の句あり、到底古き部派分裂以前ものとはうけがはれぬ。

(b) *Khandhavatta Jātaka* (J. No. 203) これは恐らく、是等の蛇呪物語の最も古き傳説であると思はれる。こゝにも「namo sattanañ Aammāsambuddhāna」の句あり、釋尊在世にまで引きあげることは不可能であらう。

(c) 雜阿卷二九經、これに相當する巴利尼柯耶は發見することが出來ぬ。然し S. 35. 69 *Upasena* 經はこれに相當するものであるが、こは前半相合すものである。然して、この雜阿の經を讀誦すれば後半蛇呪のあるものは後世の附加なることは一目して知られ、これ蛇呪の流行して後こゝに經

典作者の纒入したものは明である。

(d) C.V. V. 6 これに相當する律は<sup>(e)</sup>であるが、その最後に來り。「復有諸比丘、處々爲蛇所螫、以是白佛、佛言、聽作呪術隨宣治之」とあり、これは明に『戒本』の所明と反對するものである。一方、小品の最後に蛇呪を終つて *Anujānāmi bhikkhane lohitāṃ mocetun ti* (比丘等よ！私は血を出すことを許さうと。)

(e) 蛇呪を終つて、「佛言聽刀破出血以藥塗之亦聽畜鋌刀」とあり、是等を對照して讀む時には、この本來の記事は M.V. VI. 14. 4. *Bhesajakkhandhakam chaṭṭham, tena kho pana samayena āyasmato Piṇḍavacchassa pabbavāto hoti, anujānāmi bhikkhawe lohitāṃ mocetan ti, na kkhamanīyo hoti, anujānāmi bhikkhawe lohitāṃ mocetvā visāṇena gaṇetunti.*「又、爾時、尊者 Piṇḍavaccha に瘡た、比丘等よ！私は血を出して角を用ふることを聽す。」とあるによつて理解せられるものであらう。隨宣治之とあるは、毒ありし時は血を出して治せよといふが釋尊の説かれしものであらう。それ故に、其等の記事の初めは、「爾時、比丘等は蛇に噛れて死んだ、佛にそれを申し上げた、佛、言はく、私は血を出すことを許さう」恐らく、これ位の記事であつたものが、蛇に噛まれて死んだといふことより部派時代に成立した是等の律典は當時流行せし蛇呪をこゝに纒入したものであらう。

かく解して蛇呪の後の句は理解されるものである。

(f) 摩訶僧祇律大比丘戒本、八三、若比丘、阿蘭處住、非時入聚落、不白善比丘、除急事波夜提に就きての廣律因緣話中に說かれてゐるものであり、五分、四分、十誦、根本說一切有部毘奈耶等の諸律の同項には、この因緣話をあげるものもなく、各律各別の因緣話をあげてゐる。これ亦部派時代の記事なることを否むことは出來ぬであらう。

以上の如く蛇呪の記事の出所は何れも釋尊在世時代に持つて行くことは出來ぬものなることが理解せらるゝ、かくて、大孔雀呪王經の蛇呪は何れを以てその素材となつたものであるか。

(a)、(b)、(c)、(d)、(e)、(f)、(g)の中、正しくはその何れでもないと思はるゝが、(e)四分律、(f)摩訶僧祇律、(g)五分律に近きものであつたらうと思はるゝ。そのある部派所屬の律典なりと思はるゝは、(一)佛說大孔雀呪王經中「爲衆破<sub>レ</sub>樵營澡浴事」とあるは漢澤律典のみに見らるゝ記事であること、(二)經中「莎底、年少出家未久、新受<sub>レ</sub>圓具學毘奈耶教」とあるは律典にその記事を求めたるより出たものであらう。(三)「佛言聽刀破出血以藥<sub>レ</sub>以塗之、亦聽<sub>レ</sub>畜<sub>三</sub>鉞刀<sub>一</sub>」この文にかはるに、こゝに孔雀は蛇の大敵なりといふ傳統的思想より孔雀呪を唱ふることにより蛇毒を退散せしめんとする意圖に出て、此處に二 Paritta は一となり、佛說大孔雀王經と漸次増廣發展せしむるべしと思はるゝ。今蛇呪に就き大孔雀呪王經のそれを諸本原材に就き對照して見ることにせん。

- (1)、持國龍王我慈念、醫羅畔拏常起慈、*Virūpakkehi me mettā, erūpathēhi me,*  
毘廬博又亦起慈、黑瞿答摩我慈念。*Chabbyāputtehi me mettā, mettāṃ kaṇhāgotanakehi cā ti.*
- (2)、末尼龍王我慈愍、婆素枳龍常起慈、  
杖足龍王亦起慈、滿賢龍王我慈念。
- (3)、無熱惱地婆婁拏、曼陀洛難得又迦、  
難陀鄔波難陀龍、我常於彼興慈意。
- (4)、阿難得迦諸龍王、婆蘇自法龍王衆、  
阿波羅市亦起慈、侵誠龍王我慈愛。
- (5)、大末那斯我慈念、小末那斯亦起慈、  
阿鉢羅羅哥路迦、室羅末尼蒲伽畔。
- (6)、達弟目佉及末尼、奔陀利迦苦鉢底、  
割孤得迦及蠡足、毛綖馬勝二常慈。
- (7)、婆雞得迦君哥羅、針毛臆行諸龍王、  
頡利沙婆及哥羅、滿耳東面常慈念。
- (8)、孤汝哥龍我慈念、婆雌弗多蘇難陀、



醫羅鉢多大龍王、濫部洛迦我慈愍。

(9)、非人龍王我慈念、上人龍王亦復然、

蔓栗祇龍常起慈、目真鄰陀我慈念。

(10)、諸有龍王行地上、或在水中作依止、

或復常於空裏行、或有恒依妙高住。

(11)、一首龍王我慈念、及以二頭亦復然、

如是乃至有多頭、此等龍王我慈念。

(12)、或復諸龍無有足、二足四足諸龍王、

或復多足龍王身、皆起慈心相護念。

(13)、此等龍王具威德、色力豐美有名聞、

天與修羅共戰時、有大神通無退法。

(14)、勿使無足欺輕我、二足亦莫見侵陵、

四足多足諸衆生、常於我身無惱觸。

(15)、諸龍及神我慈愛、或在地上或居空、

常令一切諸衆生、各起慈念相護念。

(4)、慈悲於諸龍、依於水陸者、

慈一切衆生、有重爲無量〔雜、九、二一〕

Apāḍakehi me mettetaṃ, mattaṃ dipāḍakehi me,

Catuppadehi me mettaṃ, meitāṃ bahuppadehi me ti.

(此偈、梵本及び僧伽婆羅譯缺、巴利又缺)

Mā maṃ apāḍako hiṃsi, mā maṃ hiṃsi dipāḍako.

Mā maṃ catuppado hiṃsi, māmaṃ hiṃsi bahuppado ti.

(16)、復願一切含生類、所有一切諸大神、Abbe satthā sabbe paṇā sabbe bhūṭāca kevalā.

常見一切善徵祥、勿覩違情罪惡事。Sabbe bhadrāni passantu, ma kañci pāpamā ti.

(17)、我常發起於慈念、令彼滅除諸惡毒、

饒益攝受離灾厄、隨在何時常擁護。

(18)、南謨窣覩佛陀也、南謨窣覩菩大裏、Nam' atthn Buddhānān, nam' atthu bodhiyā.

南謨窣覩未多也、南謨窣覩木帶裏。

(19)、南謨窣覩肩多也、南謨窣覩扇帶裏、

<sup>(四)</sup>Namō Vimuktīya Namō Vimuktīye. Namō Vimutānān, namo Vimuttiya.

これによつて、第一偈、第十二偈、第十四偈、第十六偈は、これをJ.No. 203の蛇Paritta(Khandā-Paritta)より、第十八偈初め半偈、第十九偈後半偈はJ. 159 (Mora-Paritta)より得たものなることを知り得るであらう。その他の諸偈はこの經典作者の増廣したものであらう。

然して、この經典の編纂年時は Bühler 教授によれば、是等 No. 302, 307, 308 諸本に相當する梵本は、梵文として法隆寺梵本よりも古く、その筆蹟より四、五世紀のものであるとのことであるが僧伽婆羅は西紀五一六年に譯出してから、それ以前に存したことは疑ひない。尙No. 310 佛說大孔雀王雜神呪經を帛尸蜜多羅が A.D. 322 に譯出し、然もこれには蛇呪が中に入つて居らぬから、

No. 303—308 梵本に相當する經は三二二—五〇〇 A. D. の内に製作され流行するにいたつたものであらう。更にこの經典の製作地は何處であらうか、これに就いては、この蛇呪の初まる前の呪文「瞿羅叉、波利鞞羅夜、婆里婆斗、提婆、娑漫底那伊利、基利要訶(*gôlâyâh pariēlaya varsbatu devô sanantēna. ihi kisi svahā*) の *gôlâ* に就いて The Bower Manuscript. Vol. II. p. 228 の註十八に Bühler, Stein 及 Hoernle 等三人の意見が出てゐるが、Bühler は Dekhan の *Gôdâvari* といふ Stein は迦濕彌羅國の *Gôdâvari* といふ、Hoernle は *Gôlâ* (or *gôlâ*) は單なる普通名詞であり、‘circle’ ‘district’ ‘valley’ の義たゞとしてゐる。是等の論争を別として、義淨譯の卷中には大夜叉の名とその住所をあげることを各々百八十三に及ぶが、その住所は重に中印度摩訶陀國附近を出す、次には北方印度、羯濕彌羅を中心とする國々であり、南方印度はわすかに羯陵伽(38, 79, 144, 154)、師子國(21, 65, 156)、摩羅耶山(69)等を出すに過ぎない。而して此の作者は止那(支那、大唐(142))を知り、疎勒(148)、靚火羅(150)、薄渴羅(縛渴、大夏(149))、烏長國(57, 171)等新興の國々を擧げてゐる。此等を考へても南方印度の作なることは出來ぬ。迦濕彌羅國 *Godâvari* 河、附近の製作である様に見える。初譯者、帛尸蜜多羅(*Srimitra*)の西城國の人(開元綠第三)とあるは、これ亦合せ考ふべきことであらう。

かくの如く、蛇 *Paritta* は、四世紀前半迄は獨立して流行してゐたものが、孔雀 *Paritta* と合して

佛說大孔雀呪王經となるに及んで、大いにその位置をたかめ、陀羅尼として盛んに讀誦、供養せらるゝ様になつたものである。かくの如く阿闍婆吠陀の眞言(マントラ)なるもの、一度佛教に入るや淨化されて、この Paritta の時期を持つてゐたるものなることを忘れてはならぬ。

#### 四

次に、この Paritta は如何なる種類のもが擧げられてゐるかを、南方巴利系經典の上から見ることにしよう。勿論、北方佛教にありては、この佛教的明呪 (Paritta) の期間を短かに過ぎ、陀羅尼となり、眞言となつて、大乘經典と共に榮え、密教の起るに及んで曼荼羅の宗教となりしものである。今、左にバリッタの經をあげよう。

	グラソブロー集 (Paritta) (※)	Miinda-Paṇṇa. p. 150 (ウ)	Visuddhi-Mag- ga. p. 414	西文 Paritta. (ウ)
	Pathama-Bhāṇavaram			
1	Saraṇāgamanani (K.P. p. 1)			
2	Dasakkhāpādāni (K.P. p. 2)			
3	Sāmaneraṇṇaṇi (K.P.)			
4	Dvattimsākkāraṇi (K.P. p. 3)			
5	Paccavekkhanāni (A.N.)			
6	Dasadhamma S. (A.N.)			

7	Mahāmaṅgala S.(K.P. p. 3)	—S.	—S.
8	Ratana S.(Sut. Nip. II.1. K.P. p. 6)	—S.	—S.
9	Karaṇīyametta S(Sut. Nip. I. 8)	—P.	—S.
10	Khandha-Parittam(A.N. II. 67)	—P.	—S.
11	Metta S.(A.N. II. 16)	—P.	—S.
12	Mattānisamsam(J. 197)	—P.	—S.
13	Mora-Parittam(J. 159)	—P.	—S.
14	Canda-Parittam(S. II. 1. 9)	—P.	—S.
15	Suriya-Parittam(S. II. 1. 10)	—P.	—S.
16	Dhajagga-Parittam(S. 1. 218)	—P.	—S.
	Dutiya-Bhānavāyam		
17	Mahākassapathero-bhojjhangam(S.N.)		—S.
18	Mahāmo-ggallathero-bhojjhaigam(S.N.)		
19	Mahācundathers-bhojjhaṅgam(S.N.)		—S.
20	Girimānanda S.(S.N.)		
21	Jsagili S.(S.N.)		
	Tatiya-bhānavaram		
22	Āṭṭanāṭiya S.(D. 32)	—P.	—S.
	Catutthaka-bhānavarum		

23	Dhammacakkappavattana-S.(S. 56. 11)	S.
24	Mahāsamaya S.(D. 20)	S.
25	Alavaka-S.(Sut. Nip.)	
26	Kasibhāradvāja S.(K.N.)	
27	Cayala-S.(K.N.)	
28	Parābhava-S.(K.N.)	
29	Accavibhanga S.(M. 141)	

以上に於て見らるゝ如く、Paritta としてあげらるゝものゝ中にも、なほ且つ Sutta の名を存して居ることは、ある時期に於て Paritta に用ひられ得る如き經典の説相のある經は、Paritta として讀誦せられてゐたことを知ることが出来る。

## 五

最後に、是等の Paritta 經典を讀誦するに就いては、又それぞれの方法があつた。我々はその方法を古き典籍の上に見出し兼ねるのであるが、西紀五世紀出世の覺音の註釋の中に發見し得る。そこには Sumaṅgalavāṇīsiṇi. p. 201. f.(暹羅版)に、其作法 (Parikamma) を次の如く記してゐる。

實に、第一に(Aṭṭhānāṭṭiya-S.) 阿吒囊胝經を讀誦すべからず。慈悲經(Metta-S.)、幢經(dhajagga-S.) 實經(Ratana-S.) 等は等を七日間讀誦すべきなり。若し解放されるならば善し、解放されざる時

には阿吒曇胝經を讀誦すべきなり。

それを讀誦する時には比丘達は麥粉(Piṭṭham) 若しは肉を食すべからず、墓地に住すべからず、何故なれば非天が誘惑の機を得る故なり。

「バリツタ」を行ふ場所は縁に塗飾させ、て其所に淨座を設けしめて坐すべきなり。

「バリツタ」を行ふ比丘は、寺より家に導く時には楯(Phalaka)と劔とにより守つて導かるべきなり。露地(abhokāse)に坐つて誦すべからず。戸の窓を鎖し、坐り、楯と劔とを持ち慈心加行して誦すべきなり。

第一に學處(Aikkhapaḍa)をとり戒に於て確立するバリツタを行ふべきなり。かくの如くして亦解放されざる寺を出で制底の廣場に降らしめ尊き座を設けさせ、燈をかゝげしめ、制底の廣場を掃除させ、吉祥話(Maṅgalakathā)を誦すべきなり。

凡ての集りが布告さるべきなり。寺の庭に老木がある、其處に、比丘僧伽は「汝等の來らざることを待つ」と遣はすべきなり。凡ての集りに來る事の出來ざるその時には、非人を捕へつゝ、「汝の名は如何ぞ」と問ふべきなり。名前が話され、彼の名を呼んで話しかけるべきなり。かくして汝の華、香等供物、尊き座具の供物、鉢にうけた食の供物、比丘僧伽によつて、汝の供養物の爲に大吉祥話が話され、比丘僧伽を敬ふことにより、「これを解放せよ」と濟ふべきなり。若し、解

放されざる時には、諸天を召請すべきなり。卿等<sup>おんみら</sup>は知り給ふ、この非人は我々の語をきかない。吾々は佛陀の語を用ふるであらう」と「バリッタ」を誦すべきなり。實に、こは在家の作法なり。若し、又比丘が非人を捕へて居るならば、座具を淨め、一切の集りを布告し、香、華等の供物を與へ、「バリッタ」を誦すべきなり。これ比丘の作法なり。

(Paṭhamameva hi Ājānāṭṭiya-suttam na bhaṇitabbam. mettisuttam dhajaggasuttam ratanasuttanti imāni satṭhāni bhaṇitabbāni. Sace muṇcati sundarāni, no ce muṇcati Ājānāṭṭiya-suttam bhaṇantabbam.

Taṇ bhaṇantena bhikkhunā piṭṭham vā maṃsaṇi vā na khāditaḥḥam. Sace muṇcati sundarāni, no ce muṇcati Ājānāṭṭiya-suttam bhaṇitabbam.

Taṇ bhaṇantena bhikkhunā piṭṭham vā maṃsaṇi vā na khāditaḥḥam susāne na vasiṭabbam. kasmā, amanussā otāram labhanti.

Parita-karaṇaṭṭhānam haritūparitani kāretvā tattha parisuddhaṇi āsanāni paṇāpetvā nisiditabbam.

Parita-kārako bhikkhu vihārato gharani nentehi phalakkavuddhehi parivāretva netabbo. abbhokāse nisiditvā na vattabbam. dvāravātapānāni pidahitvā nisinnena āvudhanatthehi samparivāritena



mettacittam purecārikam katvā vattabham.

Paṭhamam sikkhāpadāni gāhāpetvā sīle patijñitassa parittam kātābham. evaṃpi mocetum asakkontena vihāram netva cetiyaṅgaṇe nipaṭṭhāpetva āsanapūjaṃ kāretvā dīpe jālāpetvā cetiyaṅgaṇam sammajjivā maṅgalakathā vattabhā.

Sabbasanniṭṭhāto ghoṣetabbo. vihārassa upavane jettihakarukkho nāma hoti tattha bhikkhusaṃgho tumhākaṃ Āgamanam paṭimānetīti pahinitābham. sabbasanniṭṭhāto nāma na labbhatt.

Tato amanusasagahito tvaṃ ko nāmāti pucchatabbo. nāme kathite nāmeveva ālapitabbo. itthaṃ nāma tuyhaṃ mālāgandhādīsu patī āsanapūjāya patī piṇḍapāte patī bhikkhusaṃgha gāraṇa etam muñcāhīti mocetabbo. sace na muñcati devatānaṃ ārocetābham tumhe jānātha ayaṃ manusso amhākaṃ vacanaṃ na karoti mayam buddhāṇaṃ karissāmāhi parittam kātābham. etam tāva gñhinam parikkamam.

Sace pana bhikkhu amanussena gatito hoti. āsanāni dhovitvā sabbasanniṭṭhāto ghoṣāpetvā gandhamālādīsu patim dātvā parittam bhaṇitābham. idam bhikkhūnam parikkamam.)

こゝに、これ Paritta 誦持の方法である。勿論、是等の方法は後世密教に於て、一、意支念誦(菩薩心念誦、聲念誦、句念誦、命息念誦)、二、先事法念誦、三、具支念誦、四、作成就念誦(大毘盧遮那成佛

神變加持經卷第三(閨一 p. 27b)に見らるゝ如き、發達したものではないけれども、是等の Parita 誦持の方法が發展整理せられたものなることは疑ふことは出來ぬ。

かくの如く、阿闍婆吠陀以來のマントラ、即ち民間信仰としての明呪 (Vidyā, Vija) は佛教に入りては Parita となり、部派分裂の繁きに至り南方佛教は Parita を、そのまゝ傳へて今日に至り、錫蘭に至りてなほ盛んに讀誦せられ、北方佛教に至りては明呪、神呪 (Vidyā, sāvitrī Div, p. 11f. 虎經宿 6. p. 34) となり、大乘佛教の興起と共に陀羅尼となり、眞言となり、曼荼羅を發展したものであることを知り得るのである。

げに、曼荼羅爲宗の密教は複雑なる如きも、佛陀を念じ、法を念じ、僧伽を念じ (Dhājagga-P. S. Vol. I. 218) て怖畏なき金剛の信心を得るにある。是の宗の淵源その遠きに由來するを知ることはである。

- (註一) Parita(A. Vol. II. 67, Ahinā, K.V. v. Khuddakavanthu khandhakam), Paritāṇa(Div. p. 614, The Bower Manuscript. XLIX. First leaf. reverse) 等に出據せらる。
- (註二) The Bower Manuscript. Vol. II. p. 226 註四參照。
- (註三) Manorathapurani. vol. II. p. 411(アヤ版) Parita せらるゝといふ。
- (註四) 佛說大孔雀呪王經にはハハ半偈を缺べ、故に Bower Manuscript. Vol. II. p. 240d にハハ補足せらる。
- (註五) 1. Dhītarāṣṭra (持國龍王, 毗留賴叉)。 2. Nairavana (耨羅畔拿, 羅羅婆那象)。 3. Vīrpaśha (毗盧博叉)。(龍王) 4. Kṛishṇa(黑)。 5. Gautama(喬答摩, 瞿曇)。 6. Maṇi(naga-rājā)(末尼), (龍王)。 7. Vāsuki 婆素因(龍)。

8. *Danḍapada* (nāga) 杖足(龍王)。  
 9. *Puraṇahadā* (pūrva) (龍王), (滿月), (龍王)。  
 10. *Nanda* (Nāga) (黃經陀), (龍)。  
 11. *Upananda* (nāga) (臥波難陀)。  
 12. *Anavartapā* (無熱惱池), 阿婆達多(龍王)。  
 13. *Varuṇa* (婆婁拿) (龍王)。  
 14. *Sanikharaka* (曼陀洛雞)。  
 15. *Takṣaka* (得叉迦)。  
 16. *Ananta* (阿難得迦)(龍王), (無邊)(龍王)。  
 17. *Vasuntika* (婆修木河)(龍王), 義淨譯缺。  
 18. *Aparijita* (阿波羅市), (無能勝), (龍)。  
 19. *Chibbasuta* (侵波), (龍王)。  
 20. *Mahāmasvin* (大末那斯)。  
 21. *Mansvin* (小末那斯)。  
 22. *Kālaka* (哥洛迦)。  
 23. *Apālaka* (阿鉢羅羅)。  
 24. *Bhogaṇ* (蒲伽畔), (有財), (龍王)。  
 25. *Śrāṇanetra* (室羅末尼), (沙羅), (龍王)。  
 26. *Dadhimukha* (達弟目佳)。  
 27. *Maṇi* (末尼)。  
 28. *Puṇḍarīka* (奔陀利迦), (白蓮華), (龍王)。  
 29. (吉鉢底), (毗鉢底底), (龍王), (方主), 梵本缺。  
 30. *Karṣaka* (割孤得迦)。  
 31. *Śāṅkhaṇḍa* (觥足), (觥河波陀), (龍王)。  
 32. *Kaiba'a* (nāgarāja) (毛婆), (甘婆羅), (龍王)。  
 33. *Aśvatara* (nāgarāja) (馬勝), (婆多羅), (龍王)。  
 34. *Saketa* (沙羅得迦)。  
 35. *Kumbhira* (君婢羅)。  
 36. *Sachlōma* (針毛), (龍王)。  
 37. *Ugāṇa* (龍行), (龍王), (臂行主), (龍王)。  
 38. *Kala* (哥羅)。  
 39. *Rishika* (頤利沙婆)。  
 40. *Puraṇa* (蒲耳)。  
 41. *Karṇaka* 漢譯三本缺。  
 42. *Sakatamukha* (車面), (蟪蛄面), (龍王)。  
 43. *Kōlaka* (孤洛迦)。  
 44. *Sununda* (蘇難陀)。  
 45. *Vasiputra* (婆毗弗多), (跋死弗多羅)。  
 46. *Elaputra* (豎羅鉢多), (大龍三)。  
 47. *Lambura* (王藍那洛迦)。  
 48. *Pitihā* (mahānaga) 漢譯三本缺。  
 49. 非人(龍王), 梵本缺。  
 50. 上人(龍王), 梵本缺。  
 51. 萬栗祇(龍), 里祇羅(大龍王), 梵本缺。  
 52. *Muchhinda* (目真鄰陀) (Bower Manuscript Mingai M.S. 義淨譯及漢譯二本との對照) J. No. 203. A. Vol. II. 67. C.V. v. 6. 摩訶僧祇律第20次四大龍王名を擧ぐ。1. *Vīrapakṣa* (M. 3.), 但し(摩)は特國(M. 1.)とす。2. *eripakṣa* (M. 2) (伊羅國)。  
 3. *Cabbyāputta* (M. 19.) 善子。  
 4. *Kaṇḍagotama* (M. 4, 5.) 黑白となり。又(摩)と巴利本との例は同一なり。  
 五分律 28, 第八種蛇と雜阿卷九, 七種蛇を四分律 42, 第八大龍王名をあぐ。但し同じからず。前者より擧ぐれば 1. 提婆賴吒(M. 1.)。2. 恒車(M. 15.)。3. 伊羅漫(M. 2.)。4. 舍婆尸(M. 19.)。5. 甘摩羅阿濕波羅河(M. 32, 33.)。6. 毗樓羅阿叉(M. 3.)。7. 瞿曇(M. 5.)。8. 難陀跋難陀(M. 10, 11.)。  
 雜阿卷九, 又八種蛇。1. 堅固賴吒(M. 1.)。2. 伊羅槃那(M. 2.)。3. 尸波弗多羅(M. 19.)。4. 欽婆羅上馬(M. 32, 33.)。5. 景拘陀(?)。6. 黑瞿曇(M. 4, 5.)。7. 難徒跋難陀(M. 10, 11.)。  
 後者は, 1. 毗樓勒叉(M. 3.)。2. 伽藍(?)。3. 瞿曇冥(M. 4, 5.)。4. 施婆彌多羅(?)。5. 多耆伊羅婆尼(M. 15,

2.)。6. 佛地經(M. 32?)。7. 濕波羅(M. 33?)。8. 提頭質陀(M. 1.)となり、尙龍王に就いては The Bowel Manuscript, Vol. II, p. 231, J. p. I. 1893, p. 67 参照。

(註六) 此處に列名せる經名はグランブロー集のシンハリ文字の寫本によると Feer 氏が "Journal Asiatique" (October 1891) 'Parita の拔萃' なる論文に掲げしものより再録せしもの、尙現在錫蘭に於て讀誦せられて居るもので、コロンボより出版せられてゐる『ピリット集』には四十八輯録せられ、前集の二十九經に更に輯録されたる近世の編纂なるものである。

(註七) 西文「バリッタ」に就ては Feer 氏の論文、寺本先生の『宗教研究』新第一卷第四號に於ける「西藏傳の阿舍經に就て」、余の拙論『佛教研究』第七卷第一、二號「藏傳巴利彌勒經に就て」等参照ありたし。

(註八) Angulimāla-Parita を加へ六經の名を列ねたり。

(註九) 西文 Parita には Metta-bhavana S. の名にて兩經を加へて一經としたり。